

# 自 己 評 価 書

(平成30年度)

平成31年3月

鳴門教育大学附属中学校

# 目 次

I	学校の現況及び目標	1
II	重点目標に対する自己評価	2
1	主体的・対話的で深い学びの実現	2
2	いじめの防止	7
3	自己有用感の育成	13
III	自己評価根拠資料一覧	18

## 本校の使命に関する取組状況



# I 学校の現況及び目標

## 1 現況

- (1) 学校名 鳴門教育大学附属中学校
- (2) 所在地 徳島市中吉野町1丁目31番地
- (3) 学級等の構成  
1 学年 4 学級 2 学年 4 学級  
3 学年 4 学級 計12学級
- (4) 生徒数及び教員数(平成30年5月1日)  
生徒数 442人 教員数 24人(正規教員)

## 2 目標

### (1) 目的・使命

本校の目的は、附属中学校校則第1条において「小学校における教育の基礎の上に、心身の発達に応じて、義務教育として行われる普通教育を施すとともに、鳴門教育大学（以下「本学」という。）における生徒の教育に関する研究に協力し、かつ、本学の計画に従い学生の実習等の実施に当たることを目的とする」と定めており、本校は義務教育を行う任務とともに、教員養成大学の附属中学校として、次のような使命をもった学校である。

- ① 大学と一体となって、教育の理論及び実践に関する科学的研究を行う研究学校としての使命
- ② 鳴門教育大学の学部学生の実地教育（教育実習）及び大学院生との教育実践研究等を行う使命
- ③ 教育界の課題の解明に努め、関係機関と連携し、本県中学校教育推進に寄与する使命

### (2) 教育目標

本校は、校則第1条に示されている中学校教育の目的の達成のため、次の教育目標を掲げ、めざす生徒像・教師像・学校像を明確に示している。

知・徳・体の調和的人格の完成をめざし、自主・自立の精神、創造的能力、豊かな人間性をそなえ、国際社会の発展に寄与することのできる心身ともにすこやかな中学生を育成する。

#### めざす生徒像

- 目標を持ち、自主的、創造的に学ぶ生徒
- 強靱な意志と体を持ち、たくましく生き抜く生徒
- 優しく思いやりの心を持ち、人につくす生徒

#### めざす教師像

- 生徒を愛し、生徒とともに伸びる教師
- 強い使命感、鋭い教育観をもった教師
- 優れた指導力をもった教師

#### めざす学校像

- 創造的な知性を磨く学問学校
- 情熱的な意志を鍛える鍛錬学校
- 強健な身体を練る体育学校
- 敬和奉仕の精神に生きる人間学校

### (3) 平成30年度重点目標（実践事項）

- ① 主体的・対話的で深い学びの実現  
ア 見方・考え方を働かせる学習指導の充実  
イ 「何ができるようになるか」を意識した指導と評価
- ② いじめの防止  
ア 温もりのある環境づくりの推進  
イ 生徒同士が語り合い繋がる活動の工夫
- ③ 自己有用感の育成  
ア 「ほめる」「認める」「励ます」場の設定  
イ 何事にも挑戦する姿勢、失敗から学ぶ姿勢の育成

### (4) 平成30年度評価項目（評価指標）

- ① 主体的・対話的で深い学びの実現  
ア 保護者対象アンケート（7月と1月に実施）  
「先生は、生徒が考えたいような課題を設定している」  
「先生は、一人一人の生徒の学習状況を理解しようとしている」  
イ 教職員対象自己申告による目標管理（2月）  
「学習指導」
- ② いじめの防止  
ア 保護者対象アンケート（7月と1月に実施）  
「学校は教師と生徒、生徒相互の人間関係が円滑である」  
「自分の子どもは、学校で本音を言える友達がいる」  
イ 教職員対象自己申告による目標管理（2月）  
「児童生徒指導等」
- ③ 自己有用感の育成  
ア 保護者対象アンケート（7月と1月に実施）  
「先生は、生徒の個性を認め、伸ばす指導をしている」  
「附属中学校の生徒は、何事にも前向きに取り組もうという姿勢が見られる」  
イ 教職員対象自己申告による目標管理（2月）  
「学級経営・学校運営・校務の処理・その他」

## Ⅱ 重点目標に対する自己評価

### 重点目標 1 主体的・対話的で深い学びの実現

新学習指導要領において、これからの予測不能な時代を生き抜く子供たちには、予測できない変化を前向きに受け止め、主体的に向き合い・関わり合い、自らの可能性を発揮し、よりよい社会と幸福な人生の創り手となるための力を子供たちに育む教育の実現を目指すことが改定の方向性として示されている。そして、そのための手立てとして「主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善」が記述されている。

本校では、これまでの実践を踏まえ、深い学びの実現に向けて、各教科等の特質に応じた物事を捉える視点や考え方である「見方・考え方」に着目し、それらを働かせた深い学びが全教科で共通した流れでできるよう授業設計モデルを構成し、それに基づいた学習過程を通して生徒が学ぶことで「社会に生きて働く資質・能力の育成」につなげようと取り組んできた。授業設計モデルの四つの場面のうち「学習課題を把握する場面」では、工夫された学習課題が設定できるように学習課題設定のポイントを整理した。また「発展させる場面」を、これまでに働かせたり確認したりした見方・考え方や別の見方・考え方等を働かせることで充実した場面とするために、展開に応じて様々な活動ができるように活動例のまとめを行ってきた。

言うまでもなく、今回総則に規定された「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善は、これまで取り組まれることのなかった全く新しいもの、というわけではなく、これまでも取り組まれてきた優れた実践の中に見られる普遍的な要素が言語化されたものがある。このことから、今まで以上に生徒の実態を的確に把握した上での授業展開の工夫が求められると思っている。10年先の社会さえ十分に予測できない時代を生きていく子供たちに必要とされる、目的に応じ創造的に問題の解決に向かうことができる、「社会に生きて働く資質・能力の育成」を目指して、授業の展開、見方・考え方を働かせるための生徒への働きかけ等の工夫に本年度は生積極的に取り組んだ。具体的には、生徒が「見方・考え方」を働かせると考えられる場面と、その「見方・考え方」が働いている生徒の具体的な姿を明らかにし、指導案上に示した。これらは各教科における資質・能力と「見方・考え方」の関係性によるものである。そして、その「見方・考え方」を働かせるための手立て（下図参考）についても考えた。

### 教師の手立てについて

#### 授業前

- 見方・考え方を板書やワークシートに示しておく
- 見方・考え方を働かせやすくする構造のワークシートの作成や意図的なグルーピングをする

### 教師の手立てについて



## 教師の手立てについて

### 授業中

- 働いた見方・考え方を板書に示す
- 場面に応じた発問をすることで見方・考え方を働かせやすくする
- 意図的指名を行い、働いた見方・考え方を共有する

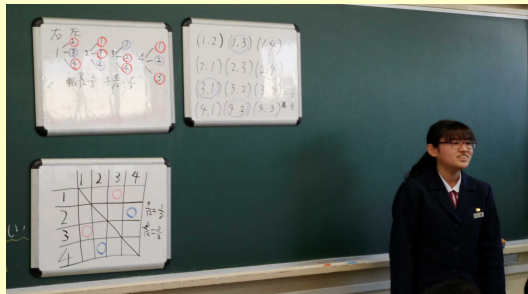
## 教師の手立てについて

### 授業中



## 教師の手立てについて

### 授業中



## 教師の手立てについて

### 授業後

- 見方・考え方を働かせている様子が表れている記述にコメントをする

## 教師の手立て ～数学科～

○ 2～4人分測れるピザの半径はいくら？

1人分  
2人分 1.56cm  
3人分 1.91cm  
4人分 2.2cm

5人分より...  $\frac{115}{10}$  cm  
7人分より...  $\frac{117}{10}$  cm  
9人分より...  $\frac{119}{10}$  cm

どうやって求めたの？  
 $11 \times 11 \times \pi = 121\pi$   
 $121\pi \times 2 = 242\pi$   
 $\pi r^2 = 242\pi$   
 $r^2 = 242$   
 $r = \sqrt{242} = 15.55$   
 $15.55 \div 2 = 7.77$

面積は相似の2乗の比  
 $m \cdot m$  のとき  
 $m^2 \cdot n^2$

半径2cmの円  
 $\downarrow$  面積2倍の円の半径は？  
 $\sqrt{2} \times 2 \Rightarrow 2\sqrt{2} \Rightarrow 2.83$  cm  
 3倍...  $2\sqrt{3}$  cm

700円の面積を2倍して円をかきとき、もとの円の半径を何倍すればよい？  
 $\sqrt{2}$  倍

半径3cmの円の面積を3倍して、半径はいくら？  
 $3\sqrt{3}$  cm

**課題の把握**      **問題解決・共有**      **振り返り**

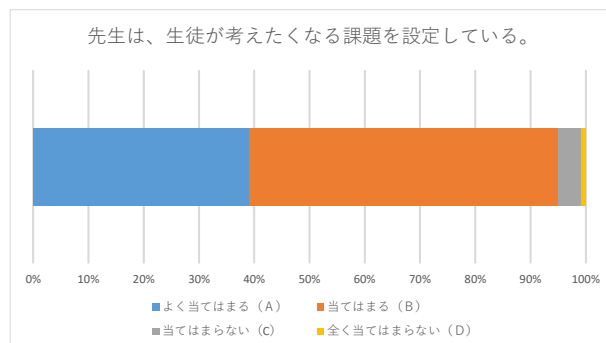
## 2 評価項目の状況

### (1) 保護者対象アンケート

「先生は生徒が考えたいくなるような課題を設定している」目標80%以上（昨年92.60%）

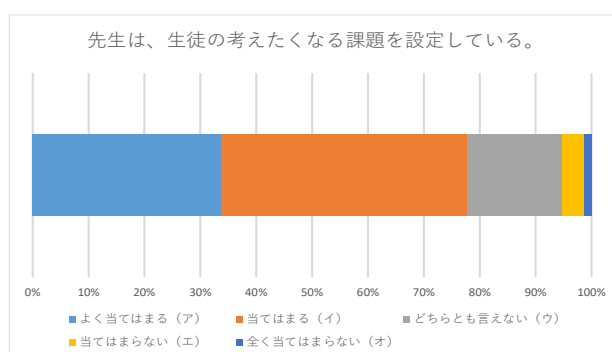
第1回（7月） 95.39%

よく当てはまる	39.19 %
当てはまる	56.20 %
当てはまらない	4.03 %
全く当てはまらない	0.86 %



第2回（1月） 77.74%

よく当てはまる	33.87 %
当てはまる	43.87 %
どちらとも言えない	17.10 %
当てはまらない	3.87 %
全く当てはまらない	1.29 %

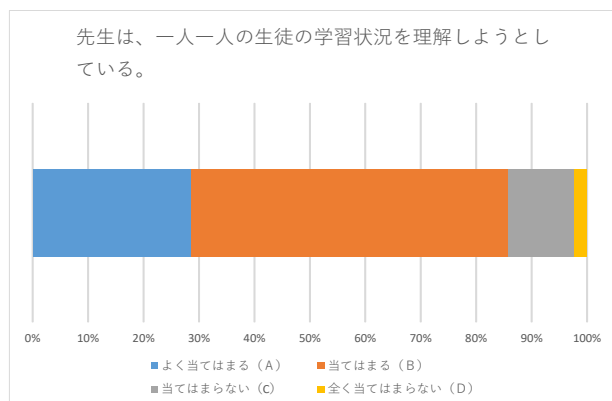


（昨年91.69%）

「先生は一人一人の生徒の学習状況を理解しようとしている」目標80%以上（昨年83.33%）

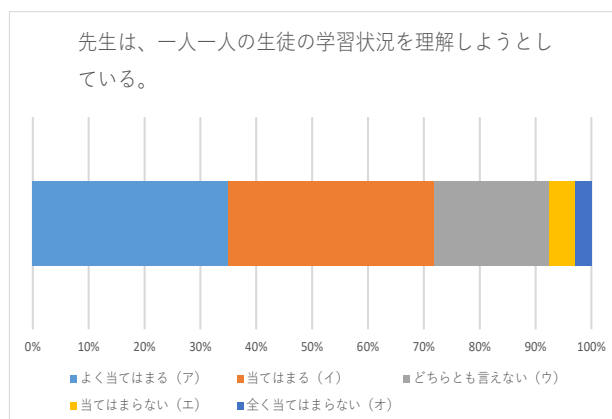
第1回（7月） 85.59%

よく当てはまる	39.19 %
当てはまる	56.20 %
当てはまらない	4.03 %
全く当てはまらない	0.86 %



第2回（12月） 71.61%

よく当てはまる	33.87 %
当てはまる	43.87 %
どちらとも言えない	17.10 %
当てはまらない	3.87 %
全く当てはまらない	1.29 %



（昨年83.10%）

(2) 教職員対象自己申告による目標管理

ア 見方・考え方を働かせる学習指導の実現

当初申告	最終申告	評価
見方・考え方を働かせた教科における思考・判断・表現力を育成をめざして中単元で2回程度授業実践をする。	中単元で平均2回以上の見方・考え方を働かせた授業が理解できたので、今後も実践を継続する。	A
見方・考え方を働かせる学習指導の工夫を図った題材開発を各単元で1題材以上行う。	生徒の反応に期待していたものと差が見られた単元もあり、ワークシートの改善や授業展開の工夫で対応した結果、題材開発は予定の2/3程度であった。	B
教材や思考を促す発問を工夫し、生徒が意欲的に取り組む授業展開を各単元に3つ以上作る。	思わず考えたくなる発問を毎時間必ず入れ、個人で考える時間を多くとり、意欲的に取り組む授業展開は3つ以上作れた。	A
授業規律や、話し合いや発表の仕方の指導の徹底を図り、単元の中で一度は話し合い活動を取り入れた授業を実践する。	授業における話し合い活動はスムーズに行えたが、話し合いや討議を取り入れた授業は、単元に一度必ずしもできていたわけではなかった。	B
各単元で働く見方・考え方をわかりやすく伝え、板書でもそれがわかるように示していく。	見方・考え方をわかりやすく板書することを心がけてきたが、板書計画について、もう少し他教科での取り組みも参考にして練っておくべきだった。	B

イ 「何ができるようになるか」を意識した指導と評価

当初申告	最終申告	評価
各単元で「何ができるようになったか」をワークシートで確認させる。	ワークシートへの書き込みが十分できるようになり、学習の振り返りに役立った。	A
各単元の「知識および技能」の目標に即して、主体的な学びの中に見方・考え方を働かせ、自己評価を通してメタ認知させる。	自己評価を継続的に取り入れたことで、生徒自身に課題意識を持たせることができた。	A
学習計画書に「振り返り」の欄を設け、この単元で何を学んだか、これからの生活にどう生かせるかを振り返らせるようにして、学期に1回程度回収する。	学期に1回は回収できた。しかしながら、それが次の学習につながっているかどうかは、疑問が残ったので更に十分な検証が必要であると感じた。	B
「振り返りシート」を月に1回程度の割合で記入させ、「何ができるようになったか」を常に意識させる。	月に1回程度の実施はできたが、シートに書かれた内容の差が大きいため、もう少し具体的な方策が必要であると感じた。	B
見方・考え方を明確にした目標を毎時間ファイルに記入させる。	毎時間目標を記入させることで、見方・考え方についての意識が高まってはきたが、まだ不十分な点も見受けられた。	B

### 3 評価項目の達成及び取組状況の自己評価

#### (1) 優れた点（成果）

- 新学習指導要領の移行が始まり、そこに示されている授業改善の視点は各教科とも十分に意識して取り組んでいる。また、附属学校園で本校のみ毎年実施している研究発表会でも、研究の中心が新学習指導要領の中核に位置することだけに注目度も上がってきた。何より、研究内容を一枚のシートにしてわかりやすく広報したり、ホームページに研究発表会のプレゼンの動画を載せたことで、研究成果の広報が今までより進んだことを実感している。
- 保護者対象アンケートやオープンスクール時のアンケートにおける「楽しく分かりやすい授業」に関する項目の評価は、本年度も高かった。授業を受けている生徒からも日常的にそのような声が全教科で聞かれるようにしたい。
- 全国学力・学習状況調査の知識・活用問題における平均正答率が、ともに全国国公立中学校の平均正答率を上回っている。個別の分析に対応した指導により、更なる向上が期待できる。

#### (2) 改善を要する点（課題）

- 各教科の特質に応じた見方・考え方は、教え込むものでなく、魅力的な教科特性を生かした授業を展開することで、生徒が気づくことで、定着が図られるものなので、それを意識して各授業にもう少し「しかけ」が必要である。そうすることで、見方・考え方を「自在に」働かせることができるレベルにまで高めたい。
- 課題解決に向けて主体的に学習に取り組む態度は、まだまだ伸びしろが多くみられる。そのため、研究発表会だけに一喜一憂するのではなく、地道に普段の学習における基本的な取り組みをおろそかにすることなく、丁寧な指導を繰り返すことで、学習面における到達度の二極化を避けたい。

以上の内容を総合し、4段階中の「 B 」と判断する。

自己評価の基準	A 十分達成されている
	B 達成されている
	C 取り組まれているが、成果が十分でない
	D 取り組みが不十分である

\* 評価項目ごとの自己評価の基準は、以下同じ



## 重点目標 2 いじめの防止

いじめは、どこの学校にもあり得るという認識のもと、本校においてもその防止に向けて、早期発見と対応に向けて全校一丸となって取り組んできた。

本校では、年3回実施するいじめに関するアンケート調査等の結果を分析し、取組が適切に行われた否かを検証し、期待するような指標等の改善が見られなかったような場合には、その原因を分析し、取組内容や取組方法の見直しを行ってきた。

昨年度より、いじめを幅広く捉えるようになり、本校でも「学校いじめ防止基本方針」を一部修正し、いじめの防止・早期発見・対処をより徹底するようにした。具体的には、「ささいな兆候であっても、いじめではないかとの疑いを持って、早い段階から複数の教職員で的確に関わり、いじめを隠したり、軽視したりすることなく、いじめを積極的に認知する」ことを徹底し、いじめ防止のための組織や相談体制を強化した。いじめ防止を担当する教員を、生徒指導担当とは別に配置し、附属小学校と兼務することによって、小学校との接続や連携をより強化できるようにした。昨年度は保健体育科、本年度は英語科の教員が担当し、附属小学校の授業にT2として入ることで、子供の実態に触れ、児童理解に取り組んだ。また、定期的ないじめに関するアンケート調査を実施することで、早期発見に努めるとともに、結果を周知する際に、担当者から生徒へ向けたメッセージを加えることで、学校の思いを伝えるようにした。相談体制については、週1回のスクールカウンセラーによる相談が広く浸透し、気軽に相談する生徒の割合も増えてきた。

また、いじめ防止に向けた道徳や特別活動における、教材や活動の工夫については、常に学年ごとに相談しながら同一歩調で進め、授業での様子や授業後の子供の感想等について、学年会を開いて確認しあっている。他にも、年間に3回ほど生徒と担任の2者面談を行い、日々の日記のやり取りだけでは気づかない、子供たちが抱えている悩みや思いを聞くことで、いじめに関しての早期発見にも繋がっている。

<いじめの防止のための組織や体制> 「附属中学校いじめ防止基本方針」から

### いじめの防止等の対策のための組織（生徒指導委員会）

#### ① 組織の構成

管理職員、主幹教諭、生徒指導主事、いじめ防止担当、学年主任、養護教諭により構成し、この組織を生徒指導委員会と称する。個々のいじめの防止・早期発見・対処に当たっては、その事案に関係の深い学級担任、部活動指導者等の教職員、及びスクールカウンセラーを追加する。なお、必要に応じて、心理、福祉等に関して専門的な知識を有する大学教職員等の助言を得る。

#### ② 組織の役割

- 学校基本方針に基づく取組の実施や具体的な年間計画の作成・実行・検証・修正を行う。
- 生徒・保護者や教職員からのいじめの相談・通報の窓口となり、報告を受ける。
- いじめの疑いに係る情報や生徒の問題行動などに係る情報の収集と記録、共有を行う。
- 緊急会議を開いて、いじめの情報の迅速な共有、関係のある生徒への事実関係の聴取、指導や支援の体制・対応方針の決定と保護者との連携を行う。

### 教育相談体制

- 教職員、生徒及び保護者、さらには生徒間の好ましい人間関係の醸成に努める。
- 生徒の個人情報に配慮するとともに、「教職員に相談すれば、秘密の厳守はもとより、教職員は必ず自分を助けてくれる。」という安心感や信頼感の醸成に努める。
- 定期的な教育相談（二者面談・三者面談）週間や相談日等を設定するなど、生徒はもとより、保護者も気軽に相談できる体制を整備し、保護者からの相談を直接受け止められるようにする。
- 相談の内容によっては指導を継続し、必要に応じて医療機関等の専門機関との連携を図る。
- 生徒や保護者に対して、広く教育相談が利用されるよう、学校の内外を問わず多様な相談窓口について広報・周知に努める。



## (2) 生徒同士が語り合い、繋がる活動の工夫

本校は多くの学校行事を例年様々に工夫し、継続している。そのような普段の授業とは違った行事を実施する際、ややもするとクラスの輪から外されたり、ついていけない子供が出がちであるが、そういう行事の時こそ、団結を強めるとともに、周りへの気配りができ、そして達成感が味わえるように、担任を中心に目配りをして子供たちの成長に繋がるよう支援をしている。中でも体育祭や文化祭では、中心になってクラスを引っ張る生徒がいる反面、運動や演劇等の創作活動が苦手な生徒もいるので、このような時こそ、それぞれの個を光らせるチャンスと捉え、生徒相互が声を掛け合い、支えあえる雰囲気作りを大切にしている。本年度は、体育祭を徳島市の陸上競技場の改築に伴い、市立体育館で実施した。本校の長い歴史の中でも初めての試みであったが、子供たちは限られた条件（制約条件）の中で、可能な限りベターな方策を練りながら（最適解）お互いに声をかけながら大いに楽しむことができた。まさに、新学習指導要領が目指している子供たちにつけるべき姿の一端を垣間見た気がした。

また朝の挨拶運動では、生徒会を中心に毎朝元気な声が玄関付近に響き渡っている。大勢に挨拶をされると、入ってくる生徒は戸惑うものであるが、だんだんとお互いに笑顔で挨拶ができるようになってきている。挨拶運動をしてきている生徒たちには、「体調の悪い生徒もいれば、登校前に何か不快なことがあった生徒もいるだろうから、大きな声で挨拶を返してくれなくてもそれに一喜一憂しなくていいんだよ。みんなは笑顔で気持ちよく友達を迎え、少しでもいい気分でみんなの一日が始まるように、という思いを込めて挨拶してね」と、伝えている。

他に、今年度初めて、特別支援学校からエコキャップを届けてくれた。長年本校で回収運動をしていることを知ったとのことで、附属特別支援学校の生徒さんが持ってきてくれたので、生徒会役員が立ち会って、簡単なセレモニーをして、一緒に回収箱に投入した。この時の温かい気持ちになれたという参加者の声を、校内で共有している。



(初めての徳島市立体育館での体育祭)



(文化祭での伝統の「ハレルヤ合唱」)



(朝の挨拶運動は雨の日も欠かさない)



(附属特別支援学校との交流)

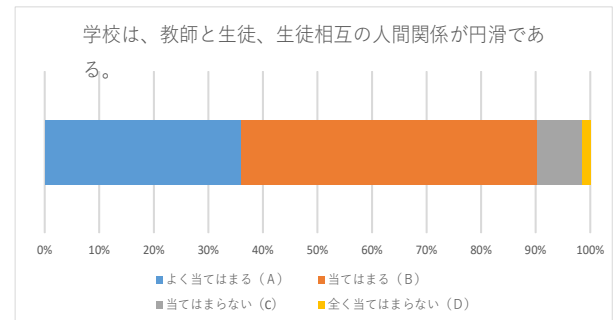
## 2 評価項目の状況

### (1) 保護者対象アンケート

「学校は、教師と生徒、生徒相互の人間関係が円滑である」 目標80%以上 (昨年89.84%)

第1回 (7月) 88.76%

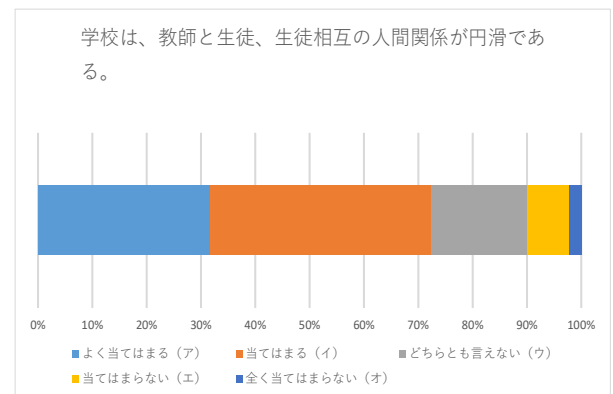
よく当てはまる	35.45 %
当てはまる	53.31 %
当てはまらない	8.07 %
全く当てはまらない	1.44 %



第2回 (1月) 72.91%

(昨年87.71%)

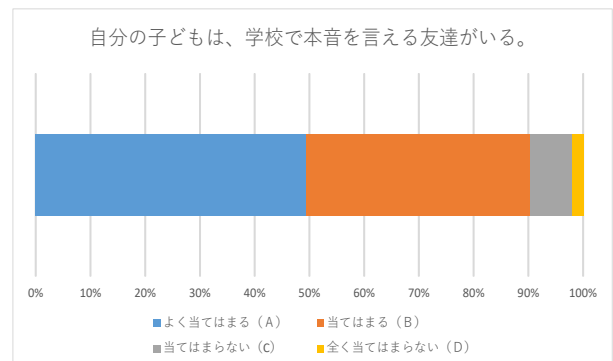
よく当てはまる	31.94 %
当てはまる	40.97 %
どちらとも言えない	17.74 %
当てはまらない	7.74 %
全く当てはまらない	2.26 %



「自分の子どもは、学校で本音を言える友達がいる」 目標80%以上 (昨年90.51%)

第1回 (7月) 90.20%

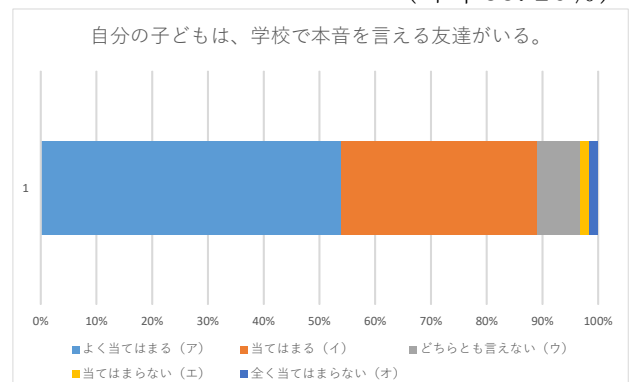
よく当てはまる	49.28 %
当てはまる	40.92 %
当てはまらない	7.49 %
全く当てはまらない	2.02 %



第2回 (1月) 89.03%

(昨年88.26%)

よく当てはまる	53.87 %
当てはまる	35.16 %
どちらとも言えない	7.74 %
当てはまらない	1.61 %
全く当てはまらない	1.61 %



(2) 教職員対象自己申告による目標管理

ア 温もりのある環境づくりの推進

当初申告	最終申告	評価
毎日、朝や昼休みの見守りに努め、1日20人以上の生徒に声かけをする。	廊下や教室などで、生徒20人以上に声かけは、100%できた。	A
教室や部活動でも、積極的に子供とコミュニケーションをとり、挨拶も積極的に行う。	休み時間など、生徒の相談にも積極的にのることができたものの、あまり会話のすまなかつた生徒もいた。	B
帰りの学活で、エンカウンターを積極的に取り入れ、子供が輝ける場を週に1回以上設けるようにする。	毎週木曜日を基本に、週に1回以上、ゲームなどを取り入れて、帰りの学活が活性化したが、少し積極性に欠ける者もいた。	B
授業開始前や昼食後に、できる限り生徒と共に過ごす時間をつくり、生徒理解に努める。	休み時間等に生徒と触れ合う時間を確保できた。昼休みは十分に時間が確保できない日が多かった。	B
背面黒板を月に2回以上書き換えて、生徒にタイムリーなメッセージを送る。	毎月、2回以上背面黒板を書き換えた。今年は人権のメッセージを多く書いた。	A

イ 生徒同士が語り合い、繋がる活動の工夫

当初申告	最終申告	評価
行事の計画には、クラス全員が関わられるように運営を工夫しながら全員に達成感を味わわせたい。	新歓音楽会、体育祭、文化祭等の大きな行事において、みんなが積極的に関わり、充実感を共有できた。	A
二者面談を3回以上行い、クラスの悩みや各自の本音を聞き、共に頑張れる学級を持続させたい。	二者面談は、3回実施できた。クラスの状況について情報収集ができ、問題解決の糸口が発見できることもあった。	B
道徳、学活においてグループでの話し合う場面を積極的に取り入れ、共に意見を出し合いながら解決策を考えさせたい。	授業での班学習において、全般に積極的にポジティブな発言を多く見て取ることができた。	B
週1回の学級活動の時間を利用して、アサーションやグループエンカウターの授業を実施する。	アサーションについては、年度当初、学年で取り組めたので、その後も取り組みやすかった。	A
学活は、自分や学級を見つめ直す機会とし、生徒自身が話し合いを進行することで集団としての自覚を育てる。	生徒主体の話し合いができるようになり、話し合いの時間がいい雰囲気よく声が出ていた。子供の日記からも「クラスの仲が良い」という記述が多くなった。	B

### 3 評価項目の達成及び取組状況の自己評価

#### (1) 優れた点（成果）

- いじめ防止担当者を配置して、小学校へ毎週木曜日にT2として出向き、児童の実態把握と共に、連携強化に取り組んでいる。
- 保護者対象アンケートや全国学力・学習状況調査の生徒質問を見ても「学校が楽しい」と感じている生徒や保護者が多い。
- いじめ防止に向けて、帰りの学活等における内容を工夫し、子供同士の活動の意場面を増やすとともに、積極的に2者面談を取り入れ、学級・学年の実態把握に日々努めている。

#### (2) 改善を要する点（課題）

- 不登校生の減少に向けて、更なる工夫が求められる。休みがちだった生徒が登校できるようになった事例もあったので、慌てすぎずじっくりと本人、保護者の願いに耳を傾けていきたい。
- 道徳教育や人権教育、ともにSNSがいじめの温床になるような事例も見られたので、情報モラル教育にも十分に力を注いでいく。

以上の内容を総合し、4段階中の「 B 」と判断する。

自己評価の基準	A 十分達成されている
	B 達成されている
	C 取り組まれているが、成果が十分でない
	D 取り組みが不十分である

\* 評価項目ごとの自己評価の基準は、以下同じ

### 重点目標 3 自己有用感の育成

多感な中学生にとって、様々なことに挑戦はしたいものの、挑戦する前に失敗することを気にしたり、周りの目が気になって、一步を踏み出すことに躊躇し、せっかくのチャンスを生かしきれないままに日々が過ぎてしまっているという経験をする者が多いことはよく知られている。本校の生徒も、その傾向は強まっていることが、長年本校に勤務する教員からも聞かれるようになった。特にバーチャルな世界やスマートフォンの画面の中でしか自分の存在を確認できない青少年が増えていることは報じられるようになって久しいが、本校の生徒も三者面談や全国学力・学習状況調査の生徒質問紙の中からもその傾向が伺えるようになってきた。

そこで、学校生活において子供が存分に、様々なことに機会を捉えて挑戦できる環境を今まで以上に作ることによって、中学時代だからこそ得られるものをしっかりと実感し、今後の自分の進路選択にも役立てて欲しいという思いで、そのために欠かせない、自己有用感を育てたいと考え、今年度の重点目標に定めた。

#### 1 実践事項への取組

##### (1) 「ほめる」「認める」「励ます」場の設定

学校生活は集団生活であり、ルールを守り、周りへの気配りをしながら生活するのは当然であるが、多少窮屈でも集団行動や、TPOに応じた言動を心がけている生徒に、当たり前なことでも生徒一人一人の努力や思いをしっかりと、我々が「認める」こと。そしてそこで「ほめる」「はげます」等をしっかりと言葉にして伝えることが重要であることは言うまでもない。

しかし、「それくらいできて当たり前」と見過ごしていたことでも、しっかり「ほめる」ことによって、子供は変わる。また、子供の取り組みで、見過ごしがちだったところはないか検証し、「認める」場を教師側があえて設定することで、子供はずいぶん輝くことができてきた。

決してテストの成績や部活動の勝敗だけでなく、その過程や友達への声掛けひとつとっても教師側が意識して「ほめる」「認める」「励ます」場を設定することで、今まで気づいていなかった子供の特徴にも築き、自己有用感を実感した子供は、学校生活も積極的になると共に笑顔も多くみられるようになってきた。認められたい、という思いは誰しもが持つ欲求であり、その場の設定、そして些細なことでもしっかり「ほめる」ことができる教員集団を目指して取り組んだ。



(全校集会で子供の頑張っている姿を紹介する)



(3年生の授業でも男女がしっかり話し合う)

##### (2) 何事にも挑戦する姿勢、失敗から学ぶ姿勢の育成

年度当初の全校集会で生徒に呼びかけたのは、「今年は、挑戦する楽しみを味わってもらいたい、このことを今年は機会を捉えて話していきます。挑戦、すなわちチャレンジは聞き慣れた言葉だと思いますが、将来の夢に向かって、身近なところから何事にも積極的に挑戦して行って欲しいと思います。挑戦したことがすべて成功すれば、それに越したことはありませんが、挑戦には失敗がつきものです。いえ、むしろ失敗することの方が多

かもしれません。しかし、その失敗したときこそ、そこに大きな学びがあり、それを通して成長できるのです。それを繰り返すことで、挑戦することが楽しいと思えるようになってくると思います。私たち附属中学校の教職員は、皆さんの挑戦をしっかりサポートし、応援します。」というものだった。全校に話す機会がある度にこの挑戦すること、失敗から学ぶ重要性を語ってきた。決して試合に勝つことや、成績を上げることだけが挑戦ではなく、今までより、大きな声で、そして笑顔で挨拶できるようになるろうとか、今までより、掃除の時間はもっと集中して頑張ろう、などもりっぱな挑戦であることも伝えてきた。その結果、それぞれの場面で大いに子供たちの頑張る姿を目にすることができた。



(文化祭では、しっかり自分たちを表現した)



(試合中のアドバイスにも様々な工夫が見られた)



(悔いの残らないように、自分との戦い)



(台風の翌朝の掃き掃除は、子供も教員も自主的に)



(仲間と共に頑張ることで得られた達成感)



(3年間の集大成「模擬県議会」での積極的な挙手)

## 2 評価項目の状況

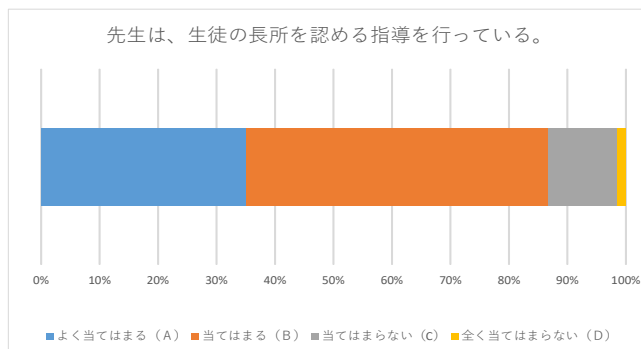


(1) 保護者対象アンケート

「先生は、生徒の長所を認め指導を行っている」目標80%以上 (昨年91.28%)

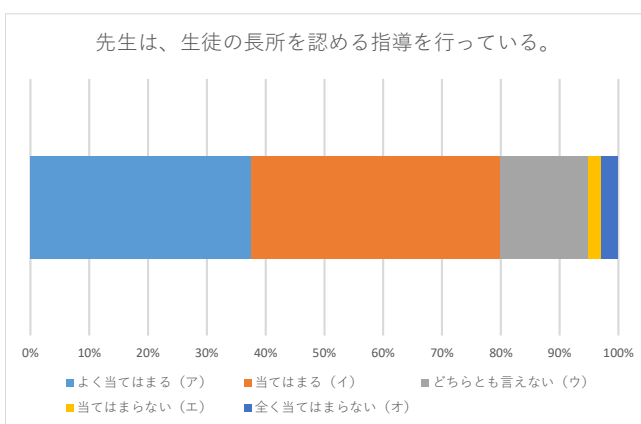
第1回(7月) 86.73%

よく当てはまる	34.29 %
当てはまる	50.43 %
当てはまらない	11.53 %
全く当てはまらない	1.44 %



第2回(1月) 80.97%

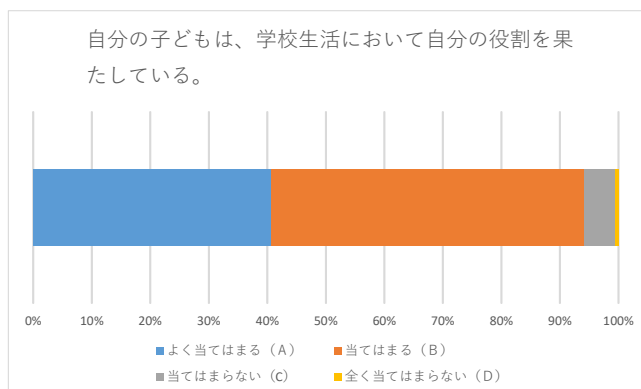
よく当てはまる	38.06 %
当てはまる	42.90 %
どちらとも言えない	15.16 %
当てはまらない	2.26 %
全く当てはまらない	2.90 %



「自分の子どもは、学校生活において自分の役割を果たしている」目標80%以上 (本年度から)

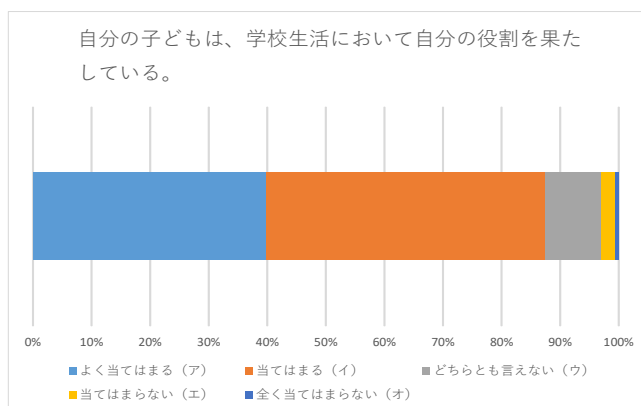
第1回(7月) 84.21%

よく当てはまる	29.11 %
当てはまる	53.89 %
当てはまらない	13.83 %
全く当てはまらない	1.73 %



第2回(1月) 88.06%

よく当てはまる	40.00 %
当てはまる	48.06 %
どちらとも言えない	9.68 %
当てはまらない	2.26 %
全く当てはまらない	0.65 %



(2) 教職員対象自己申告による目標管理

ア 「ほめる」「認める」「励ます」場の設定

当 初 申 告	最 終 申 告	評価
生徒とのふれあいを大切に、「ほめる」「認める」「励ます」を意識した指導を行って学級づくりをしていく。	生徒や保護者の様子を把握することに手間取り、自分が思っていたほど生徒への声掛けができなかった。「励ます」場面は、意識して取り入れた。	B
学級通信を発行し、クラスでの出来事を大きく取り上げ、賞賛したり、励ます場面を積極的に取り入れていく。	月一回以上学級通信が発行でき、クラスで起こったトピックも取り上げていった。子どもたちの成長が見て取れた。	A
係活動や、清掃を頑張っている生徒をしっかりと「ほめる」ことで、それらの子どもを周りがしっかりと認め、その行為に習う集団にしていきたい。	清掃時間、おしゃべりばかりしていた生徒もだんだんと、短時間で能率的に清掃ができるようになってきた。ここにも「ほめる」「励ます」の効果が現れた。	A
部活動では、技術的に厳しい生徒にもしっかりと声をかけ、個々の伸びをしっかりと認め、ほめて、励ますことで全体のモチベーションを高めていきたい。	全ての部員に毎日、十分に声はかけられなかったが、それぞれが目標を定めて取り組んでいる様子が見られた。指導の中でもしっかりと「認める」場を設定した。	B
帰りの学活の活性化をするため、「今日がんばっていた仲間の紹介」のコーナーを作って、互いに認め合う雰囲気づくりを心がけたい。	帰りの学活もマンネリにならず、子供たちが積極的に関わられるようになってきた。頑張った生徒が後半、固定化される傾向が出てきたので、工夫させた。	B

#### イ 何事にも挑戦する姿勢、失敗から学ぶ姿勢の育成

当 初 申 告	最 終 申 告	評価
授業中、発表等に消極的だった子供たちに、間違いが大きなヒントやカギになることを示して、自信を持って発表できるよう発問の仕方やアドバイスを工夫する。	授業での発表が2割程度増えた。正解のみを答えさせる発問を減らして、正解への道筋になる材料を考えさせ、それを問うことで、発表しやすい雰囲気づくりができた。	A
新入生歓迎音楽会や文化祭、体育祭などの行事に前向きに積極的に取り組める学級にしていきたい。	中学校最後ということもあつてか、どの行事にも積極的に取り組めて、クラスの一体感が高まってきた。	B
あいさつを積極的にすることで、何事にも明るく前向きに取り組ませたい。	挨拶の返せない生徒はいなくなった。まだまだ、自分から積極的にできない子供も多い。	B

### 3 評価項目の達成及び取組状況の自己評価

#### (1) 優れた点（成果）

- 「ほめる」ことを意識してその場を設定し、行うことで明らかに子供の表情も変わるし、やる気に繋がる場面が多く見られた。
- 「励ます」ことを意識すると、『がんばれ』などという一言でなく、よりの確なアドバイスをしようとして、その結果生徒の言動をよく観察するようになったので、生徒理解が深まった。
- 意識して「ほめよう」としているとき、子供たちも今まで何気なく、面倒くさいからと、よく考えて行動していなかったことを意識してできるようになった。

#### (2) 改善を要する点（課題）

- 「ほめる」場を設定しようとしても、生徒理解が進んでいないと難しい。まずは1日も早くクラス全員の生徒理解を深め、授業に来てくれている他学年の先生に共通理解してもらう必要がある。
- 失敗から学ぶ例をしっかりと示して、実感させようとしても、なかなか経験が乏しく励ます場面も随分と減ってしまった。

以上の内容を総合し、4段階中の「 B 」と判断する。

自己評価の基準	A 十分達成されている
	B 達成されている
	C 取り組まれているが、成果が十分でない
	D 取り組みが不十分である

\* 評価項目ごとの自己評価の基準は、以下同じ

### Ⅲ 自己評価根拠資料一覧

	観点番号	資料番号	添付	別添	資 料 名	備考
1	1・2・3	参考資料1	○		平成30年度学校評価アンケート結果 (保護者対象アンケート集計結果)	
2	1・2・3	参考資料2		○	教職員対象自己申告による目標管理自己 評価結果	資料回収
3	1	参考資料3		○	平成30年度全国学力・学習状況調査結果 (学力調査)	資料回収
4	2	参考資料4		○	平成30年度学校生活アンケート集計結果	資料回収
5	2・3	参考資料5		○	平成30年度全国学力・学習状況調査結果 (生徒質問紙)	資料回収
6	1・2・3	参考資料6		○	平成30年度オープンスクールアンケート 結果	資料回収